



一般社団法人 日本LD学会
Japan Academy of Learning Disabilities

会 報 第 110 号

事務局

〒108-0074 東京都港区高輪 3-24-18 高輪エンパイヤビル 8F
TEL 03-6721-6840 URL <http://www.jald.or.jp>



主な記事

- ・ DCDについて
- ・ 小学校における外国語（英語）教科化とその課題
- ・ <連続講座> 将来の自立を目指した、ライフステージを通じた支援
- ・ <連続講座> 各地の発達障害者支援センターの取り組み
- ・ 国際委員会の取り組みについて
- ・ PATIO～実践の最前線～



不均一性 (Heterogeneity) について

筑波大学 人間系

岡崎 慎治

日々、知的障害や発達障害のある子どもの認知特性の評価や評価に基づく支援に関する研究活動をやっているつもりです。そのアプローチは実験であったり、相談であったり、検査実施だったりですが、どのようなアプローチであれ、頭を悩ませるものでもあり、考慮すべきでもあるのが、個人差の大きさだと感じています。このことに関して、この10年くらいの間に、いくつかのADHDやASD、LDにおける不均一性 (Heterogeneity) の存在を指摘する研究、それをどう扱うかに関する研究が報告されてきています。それらを見る限り、多くなくても同じようなことを考えている人たちはある程度おられるのだと実感できます。この、不均一性 (Heterogeneity) については、検査の開発や実施、その解釈にもかかわる中でも、子どもたちが示すさまざまな困難への対処方法、方略の利用を含めた補償的な処理・代替的な処理

による補いによるパフォーマンスの近似化あるいは向上の可能性にもあてはまるところ、やはりそれらについて指摘する研究もあります (これらは heterogeneity developmental disabilities というキーワードで検索するといろいろ出てきます (英語ですが))。

個人差が大きいのは当たり前だ、とお叱りを受けそうだなと思いつつも、それでも考え続けなければならないのは、多少なりとも理論的背景に根ざしたアプローチを、不均一性を考慮しつつ、個々の子どもに特化したアプローチにどう結びつけていくか、だと思っています。そのためには、かかわるこちら側が、ある考えややり方にこだわりすぎないようにすることも大事だという、やっぱり当たり前だろうと叱られそうなこともまた、考え続けなければならないと思っています。